

がん専門医に聞く

富山労災病院 外科部長

よしもと かつひろ
吉本 勝博



H28年 移転予定(新病院イメージ)

－ 胃癌について (2) －



今回は前回に引き続き、胃癌が見つかった場合の治療に関してお話をさせていただきます。

胃癌の治療方法はその進行度（早期であるか進行しているか？転移【飛び火】があるかないか？）によって異なります。前回お話ししたようにCTやPET検査などを行うことにより進行度を判定し、早期癌と考えられる場合には内視鏡的切除、特に当院消化器内科で積極的に行われている内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）で治療が終了する場合があります。ただし、内視鏡的切除では癌が残ってしまう場合や進行癌の場合には、手術や化学療法（抗癌剤治療）が必要になります。

手術はこれまではお腹を大きく開ける開腹手術が主に行われてきましたが、最近では腹腔鏡手術といってお腹に数ヶ所の小さな穴を開け、腹腔鏡というカメラを入れて行う手術もできるようになり、当科でも内視鏡的治療が不可能な早期癌の症例に対して行っています。腹腔鏡手術の場合は傷が小さいので術後の痛みが少なく、回復も早いので早期の社会復帰が可能となります。

手術により切除された組織は顕微鏡検査を行い病理診断がなされ、癌が胃の壁のどこまで深くもぐっているか（深達度）あるいはリンパ節や他の臓器に転移があるかどうかによって最終的な進行度（ステージ）が判定されⅠ～Ⅳ期に分けられます。

Ⅰ期の癌の場合は手術でほぼ治る可能性が高いのですが、Ⅱ～Ⅳ期の場合にはほとんどの症例で化学療法が必要となります。Ⅱ、Ⅲ期の場合に行われる化学療法は、術後補助化学療法といい再発の予防を目的としています。Ⅳ期の場合にはすでに多臓器に転移している状態であるため主に延命治療が目的となります。

なにはともあれ、早期発見・早期治療にまさるものはありません。市町村の検診または病院を受診し、まずは内視鏡検査を受けられることをお勧めしたいと思います。



発行： 独立行政法人労働者健康福祉機構富山労災病院 地域医療連携室

Tel : 0765-22-1354 Fax : 0120-935-631 (フリーダイヤル)

ご質問やご相談は地域医療連携室まで、また富山労災病院ホームページもご覧ください。